

# シェイクスピア劇の台詞，その配列および配分と シーン内部の段階的発展との関連について

—『ジュリアス・シーザー』第二幕第一場を中心に—

市川真理子

## I

『ジュリアス・シーザー』第二幕第一場<sup>1</sup>——そこで行われる会談において、ブルータスは仲間たちから出されるほとんどすべての提案に対して反駁する。それは彼の発言の出出しだけを引用してみても明らかである。

*No, not an oath! . . .* (l. 114)

*O, name him not; let us not break with him, . . .* (l. 150)

*Our course will seem too bloody, Caius Cassius, . . .* (l. 162)

*Alas, good Cassius, do not think of him. . . .* (l. 185)

このように彼が他の者に反論したり，他の者に対して優位に立つ例を十四項目にわたって提示した上で，ゴードン・ロス・スミスはブルータスの内面に潜む傲慢な性格を主張し，ブルータスがシーザーを殺害する計画に賛同したのは，自分を支配することができる人間が存在すると考えると我慢ならなかったからであると述べている。<sup>2</sup> 丹念に例を集めた上での議論でありながら，スミス論文が結局不毛な議論に終わっているのは，十四例の妥当性そのものが極めて疑わしいからである。そしてその非妥当性の原因は，台詞には当然それを語る人物の意識ないしは潜在意識が反映されているという前提であり，従って台詞が書か

<sup>1</sup> シェイクスピア劇からの引用および幕・場・行の言及はすべてリヴァーサイド版 (*The Riverside Shakespeare*, ed. G. Blakemore Evans (Boston: Houghton Mifflin, 1974)) に拠る。ただしイタリック体への変更はすべて筆者による。

<sup>2</sup> Gordon Ross Smith, 'Brutus, Virtue, and Will,' *Shakespeare Quarterly*, 10 (1959), 367-79.

れる事情あるいは台詞が負う条件を確認するという手続きが省かれていることである。

確かに台詞は劇中人物の言葉として語られる。しかしそれは台詞の存在条件であり、あらゆる台詞は劇中人物の言葉としてしか語られ様がないのである。劇作家は基本的には劇中人物の対話として遣り取りされることになる台詞の中に、対話を行う人物の身分・素姓等や相互の関係あるいは対話が行われる原因や状況等の説明など、対話という劇中の設定とは矛盾する、一重に観客のための情報をも盛り込むはずであるし（特に劇の始めにはこの傾向が顕著である）、さらに対話の体裁を整えるための台詞も工夫するであろう。このような事情で書かれた台詞も又、劇中人物の言葉として語られるように配分されているのである。ある台詞を劇中に仮構された世界に存在するある人物の言葉として論ずる前に、必ず一度はその台詞が存在する事情と条件に立ち帰ることが我々の義務である。

劇作家は台詞を人物に配分する際、無論それを語るにふさわしい人物に与えるはずであるが、余人ではなくある人物の言葉であるということ自体に力点を置く場合もあれば、置かない場合もあるだろう。その二つの場合とは、我々の立場からすれば、ある人物の言葉として台詞を論ずることが有意義である場合と無意味である場合である。しかし有意義な場合に我々が論ずべき問題は、その人物の感情や性格に尽きるのであるだろうか。これから行うブルータスの台詞の分析が、この問いに対する答えとなるはずである。

本稿は主たる対象として『ジュリアス・シーザー』第二幕第一場を選び、ここでは（誰の）どのような台詞がどのような形で続いてシーンの進行を支えているのかということ进行分析することにより、シェイクスピア劇の台詞の一樣相を提示することを目的とする。対象が選ばれた理由は、スミス論文を引き合いに出して本稿を始めた以上、ブルータスが語る言葉として書かれている台詞を本稿で定めた視点から考察する義務があることにもよるが、そこにシェイクスピア劇、そのうち特に悲劇のシーン内部の進行あるいは発展の仕方——台詞の流れとシーン内部の進行・発展との関係——の一つの典型が認められるからで

ある。

## II

『ジュリアス・シーザー』第二幕第一場は大別して 1) ブルータスの内省 (ll. 1-85), 2) ブルータスと陰謀仲間との会談 (ll. 86-228), 3) ポーシャの質問とブルータスの応答 (ll. 233-309), 4) ブルータスとライゲアリュスとの会談 (ll. 310-334) として提示される四つの部分から成る。(行数を表示する括弧内の数字が必ずしも連続しないのは、各部分の〈繋ぎ〉の機能を果す台詞が語られる部分があるからである。) このうち本稿が詳しく分析するのは、第一・第二の部分である。

最初の部分は、第一幕第二場でキャシャスによってシーザー打倒のために立ち上るように煽動されたことに対するブルータスの反応である。<sup>8</sup> 1) 彼は既に心を占めているシーザー殺害に対する理由付けを行い (ll. 10-34: 25 ll.), 2) 暗殺を決意し (ll. 44-58: 15 ll.), 3) 実行に移してしまうまでの精神不安定に苦しむ (ll. 61-69: 9 ll.)。 (なお 4) ll. 77-85: 9 ll. は、次の会談の部分に繋がるので、これについては後述する。) この部分で問題にしたいのは、召し使いルーシャスの都合四度の登場の機能である。つまり、彼の登場によって可能となる主従のほぼ一行ずつの台詞の遣り取りが、ブルータスの台詞 (独白) を区切っているということである (ll. 6-9; ll. 35-43; ll. 59-60; ll. 70-76)。そしてその形式上の区切れ目は内面上の区切れ目とも一致していて、ブルータスの内省の内容が一段落するところでルーシャスが現われて情報をもたらし、それがブルータスを刺激して彼の内省の段階を進めている、という設定である。長い四十九行 (あるいは五十八行) の独白の形で一挙に、言わば〈追い込み〉の形で語られた場合には明確化されなかったであろうブルータスの思考段階 (つまり彼の考えが次第に固まる様子) は、独白が〈段落分け〉された形を呈していることによって顕現させられているのである。

内省の各段階は、ブルータスが暗殺計画に身を投じて行く段階であり、つま

<sup>8</sup> See Appendix A, pp. 53-55.

り彼が辿る運命の段階そのものである。最初の段階で、彼がシーザー殺害を正当化する根拠としてシーザーが暴君になる危険性しか挙げていないこと、つまり冒頭の 'It *must* be by his death' (l. 10) という言葉から 'So Caesar *may*; Then lest he *may*, prevent' (ll. 27-28) という言葉への語調の低下に見られる龍頭蛇尾は、それ自体この段階を不安定なものとし、それを土台としてなされる殺害の決意が危険なもの——ブルータスの悲劇的死に至る一つの段階——として提示される要因となるであろう。

第二幕第一場からしばらく離れることになるが、一連の短い台詞と長い台詞とが交互に繰り返されることにより、発展の段階性が明確化されている好例として第三幕第二場が挙げられる。このシーンは五段階の発展を呈するが、それは演説として語られる長い台詞と、それに続く民衆同志あるいは民衆と演説者との間で遣り取りされる言葉として語られるほぼ一行ずつの台詞（ただし、演説者の台詞は多少長く、大方数行ずつ）の纏まりとが一對になって一単位を成し、それが五つ重ねられるという形で明確化されている。尤も、第一段階と第二段階との間には人物の登場と退場、そしてそれに伴う中心人物（演説者）の交替という一層明確な区切れ目が存在するので、五段階は一樣に続いているわけではなくて、最初的一段階と後の四段階との二部を呈していることを断って置かなければならない。さらに付言するが、五段階の終結（民衆の退場とそれに対するアントニーの評言としての台詞）の後に続く末尾の部分 (ll. 261-271) は、このシーンを自然に閉じる機能と、さらにこのシーンと一つ隔たるシーンとを繋ぐ補助線のような機能を持つもの、具体的に言えば、アントニーの退場をオクティヴィアスの許へ向う行動として意味付け、そうすることによって彼の退場を第四幕第一場のオクティヴィアスを伴った登場に繋ぐものであるが、この部分は考察の対象からは除かれる。

第一段階（第一部）は、民衆に要求されて (ll. 1-11)、ブルータスがシーザー殺害に及んだ理由を弁明し (ll. 12-34: 23 ll.)、それは民衆の承認を受け、彼らはブルータスを讃えつつ家に送り届けようとするが、彼はそのまま残ってアントニーの演説を傾聴するように民衆を説得して退去する (ll. 35-61) とい

うところまでであるが、ブルータスの演説は一口に、シーザーが野望を持っていたのでローマの自由を守るために彼を倒した、と要約できる簡明なものであり、続いて行われるアントニーの演説が段階を踏んだ巧妙なものであるのと対照的に、彼の演説自体は段階化されていない。

ブルータスが去った後(第二部)、民衆が彼の弁明と説得に対する反応を続けている中で(II. 62-72)アントニーが始めるシーザー追悼の演説は、実質的にはブルータスの料弾であり、彼を滅亡に至らしめるものであるが、その演説は大別して四段階から成る。すなわち、アントニーは 1) まずシーザーに着せられた「野望」の汚名を拭くと同時に、それを主張したブルータスの人格を暗に否定し(II. 73-107: 35 ll.)、2) 次にシーザーの遺書をちらつかせ、その内容をほのめかす(II. 118-137: 20 ll.)。3) さらにシーザーの衣服の破れを一々指し示しながら、「反逆」の残虐非道さを強調し、最終的には遺体そのものを民衆の目に触れさせる(II. 169-197: 29 ll.)。そして 4) 仕上げに「暴動」を起こすように暗にしかし強く煽動するのである(II. 210-230: 21 ll.)。彼の演説の各段階の区切れ目では、民衆同志あるいは民衆とアントニーとの間で短い言葉の遣り取りが行われるが、そこに見られるアントニーの演説に対する民衆の反応も、1) 最初にシーザーに対する同情を表明し(II. 108-117)、2) 彼の遺書を読んで欲しいと願う中で、ブルータスたちを「反逆者」と呼ぶようになり(II. 138-168)、3) 「復讐」を叫ぶに至り(II. 198-209)、4) 終に具体的な復讐方法として「反逆者たちの家を焼き打ちする」ために飛び出して行く(II. 231-259)というように、演説の段階に見合う形ではっきりとした段階を以て呈示されていて、演説の効果を確証するものとなっている。

ここで第一部一段階と第二部四段階を合せて、第三幕第二場の五段階の發展を整理するならば、一旦は民衆の讚美の対象に引き上げられたブルータスが、言わば落差を得た後で真直ぐに滅亡に追い込まれて行く過程を明確に示しているものである。

話を第二幕第一場に戻すが、ルーシャスがキャシャスたちの来訪を告げて退場してから一行が登場するまでの〈繋ぎ〉の部分であるブルータスの独白(II.

77-85) は、陰謀を抱く者が他の目を欺くために持つべき心構えについてであり、最早、彼のリーダーとしての自覚を反映する台詞である。前場最後のキャシャスの台詞 'Let us go, For it is after midnight, and ere day We will awake him and be sure of him' (I. iii. 162-164) は、彼とキャスカの退場をブルータスの家に向い行動として意味付け、かつそれを今度の来訪としての登場に繋ぐ機能を持つものであったが、台詞の内容であるブルータスの説得はこのシーンでは全く行われぬ。しかし、会話がキャシャスたちによるブルータスの説得ではなくて、直接、ブルータスを中心としたシーザー殺害の計画についての話し合いとなっていることは、前の部分の発展段階を受け継ぐ部分としてむしろ当然である。尤も挨拶 (II. 86-99) を終えて話し合い (II. 112-228) に入る前に、ブルータスとキャシャスが二人だけで何事かを語り合っているという漠然とした状況が示されることによって (II. 100-111), その飛躍は埋められているとも言えるが、しかしそれにしても、この部分は彼らの台詞を必要としないことは確かなのである。いや、ブルータスが決断する思考過程は既に提示されたのであるから、ここでキャシャスに対する言葉という設定であるにしても、ブルータスの決意が確認される台詞が存在するとしたら、それは重複に他ならず、シーザー殺害という差し当たりの終結点を目指して進展している劇の発展を徒に逆行させることになるだろう。

この章では、大方は端役のものである一連の短い台詞と主要人物の長い台詞とが一對になって単位をなし、それが数個重ねられて、シーンあるいはその下位単位となる部分の段階的発展に形を与えている例、比えて言えば〈詩脚〉と〈韻律〉にも相当する台詞の配列方法を示した。章を改めて、ブルータスと仲間たちとの話し合いの分析に入る。

### III

ブルータスとキャシャスが二人だけで言葉を交すのを止めて他の者たちに向き直るところから、話し合いが済んで来訪者たちが引き取るまでに遣り取りされる言葉として書かれている台詞 (II. i. 112-228) が当分の考察の対象であ

る。<sup>4</sup>

本稿冒頭で述べたことであるが、確かにスミスが指摘する通り、ブルータスは誓言を取り交す提案、シサロウを仲間に加える提案、シーザーと同時にアントニーを殺害する提案、さらに示されたアントニーに対する不安のいずれに対しても次々と反対意見を述べ、その結果彼の意見が通る。粉本である『プルトーク英雄伝』には、陰謀家たちが誓言を取り交さなかったという事実、彼らがシサロウの臆病な性格等を考慮して彼には計画を打ち明けなかったという事実、そして他の者たちは皆アントニーも殺害することを善策と考えたがブルータスが同意しなかったという事実が記述されている。<sup>5</sup> 従って、脚色する際提案とそれに対する反論としての台詞に仕立て（劇中人物の言葉として語られることが台詞の存在条件であることは無論承知しているが）、反論の台詞をブルータスのものとしたのはシェイクスピアの責任であることは事実である。<sup>6</sup> しかし彼はこのように脚色することによってブルータスの、何事においても他の者を抑えなければ気が済まない我がままな性格を表現しているのだろうか。ブルータスと仲間たちとの話し合いの部分では、もっと別のことに重点が置かれているのではないかと思われる。

話し合いで確認されるのは次の八つのことである。つまり 1) 行動を起すにあたって動機が強く、結末が固いこと (ll. 112-140), 2) 追加メンバー候補としてシサロウが不適であること (ll. 141-153), 3) 殺害は神々に対して犠牲を捧げる行為として行い、対象はシーザーに限定すること (ll. 154-183), 4) アントニーは恐れるに足らぬこと (ll. 183-191), 5) 現時刻 (l. 192), 6) シーザーを確実に議事堂に引き出すために全員で迎えに行くことおよびその時刻

<sup>4</sup> See Appendix B, pp. 56-59.

<sup>5</sup> *Plutarch's Lives of the Noble Grecians and Romanes*, trans. Sir Thomas North (1579), rpt. in Geoffrey Bullough, ed., *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, Vol. V (London: Routledge and Kegan Paul; New York: Columbia Univ. Press, 1966), p. 97; pp. 102-3.

<sup>6</sup> 特にシサロウを仲間に加える提案に対する反論として、シェイクスピアがブルータスに与えた 'For, he will never follow any thing That other men begin' (ll. 151-152) という台詞が、ブルータス自身の態度に対して観客の批判的意識を向けさせる可能性があることは否定できない。

(ll. 193-214), 7) 仲間にライゲアリヤスを加えること (ll. 215-220), 最後に、解散するにあたって 8) 計画を成就させるための心構え (ll. 221-228) である。この話し合いの部分も、ブルータスの内省の部分に認められた段階的發展を受け継いでいる。一旦、現時刻の確認と解散に際しての訓戒を除くと、話し合いには六項目の議題が認められるわけであるが、その内容は次第に計画の核心に触れるものに移り変っている。さらにここでは誰かの提起によって議論が開かれて、それがブルータスの賛成あるいは反対の意見によって決着するという形が単位となりそれが繰り返されているが、その反復は一つの単位の終点となる台詞が同一人物（ブルータス）のものとなっていることにより一層明確である。<sup>7</sup> このようにして、議論の内容の段階的發展は形を与えられている。なお一旦外してある二項目は、命令と応答、暇乞いと別れの挨拶という形、つまり提起と承認という形の変形である。

現時刻が確認される際時計が言及されることは、シェイクスピアが犯した時代錯誤の例としてよく引き合いに出されるが、しかしここが、議題がシーザー殺害に対する精神的態度という抽象的問題から、時間・場所に関わる具体的計画へと大きく飛躍するためのきっかけとなっていることは注目に値する。スミスは 'Peace, count the clock' (l. 192) という言葉さえ、トリボウニヤスの言葉が作った明るい雰囲気壊して沈黙を漂わせたとして、ブルータスが他の者たちを支配する例に加えている。<sup>8</sup> しかし、このブルータスの言葉としての台詞は語る人物自体に力点を置かれてはいない。この台詞の存在価値としては、緊張感を作り出すこと、つまりシーザーの殺害が時間の問題になっていることを台詞の受容者である観客に感じさせること（その台詞の後間が空けられるとしたら、それを沈黙として受容し、その効果を経験するのも観客である）を論ずる方が有効であろう。そして台詞のそのような効果を見込んだ上で、この後計画の核心に触れる議論としての台詞が続けられているのではないだろうか。

追加メンバー候補に関する議題が前後二度に分けられているが、シサロウに

<sup>7</sup> See Emrys Jones, *Scenic Form in Shakespeare* (Oxford: Clarendon Press, 1971), pp. 17-18.

<sup>8</sup> Smith, p. 369.



についての提案とライゲアリヤスについての提案の台詞の位置は決して相互に交換可能なわけではない<sup>9</sup>、一度に統合してしまうわけにもいかない。なぜならば、前者は否決されるために結果的に議論の実質的進展に何ら貢献しないのに対して、後者は賛同を得て 'Now, good Metellus, go along by him. . . . Send him but hither, and I'll fashion him' (ll. 218-220) という新たな行動に対する具体的命令を受けることにより、結果的に殺害の計画を進展させるという相違があるからである。これに関連して述べれば、時刻が確認される前になされる提案はすべて反対されて実を結ばないものとなっている。

現時刻の確認とともに、議題の数には含めずにおいた解散際の訓戒についてであるが、訓戒はキャシャスの台詞とブルータスの台詞とに分たれていて、両方とも、あるいは両方合せて、会談(実質的には話し合いの六段階)を総括(一括)するものとなっている。具体的に言えば、キャシャスの ' . . . but all remember What you have said, . . . ' (ll. 222-223) という台詞の内容はそのまま話し合いの始めから終わりまでを一纏めにするものであるし、ブルータスの台詞 'Good gentlemen, look fresh and merrily; Let not our looks put on our purposes, . . . ' (ll. 224-225) が仲間たちを迎える直前の独白 'Seek none [i.e., no cavern], Conspiracy! Hide it [i.e., thy monstrous visage] in smiles and affability; . . . ' (ll. 81-82) と全く同じ内容と調子のもにに戻ることは、〈始め〉に対応する〈終り〉を与えて会談全体を一括りにすることに他ならない。さらに、挨拶を交すことに始まってから、提案あるいはそれに対する意見としての台詞を分担して語ることによって、言わば向い合って来たキャシャスとブルータスの二人が、ともに同じ方向(他の五人)に向かって、訓戒という同じ調子の台詞を順に語ることは、比えて言えば〈対句〉の効果を以って会談を締め括ることである。

話し合いの段階的發展を確認し、さらにそれに付随する問題にも目を向けたが、ここで我々が考えるべきことは、一つの議題の議論を終結させる台詞がす

<sup>9</sup> 因みに粉本では、ライゲアリヤスに関する記述の後にシサロウに関する記述がある。See *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, Vol. V, pp. 96-97.

べてブルータスのものであることの形式上の価値ではなくて、その言葉がブルータスのものであることの内的な意味である。既に見たように、会談で彼がリーダーの位置に納まることが少しも唐突ではないように劇（第二幕第一場）は進行している。しかし彼には自ら提案する言葉はなく、彼は仲間の誰か（大体はキャシヤス）の提案や意見に対して賛否どちらかの決定的な意見を述べることに終始する、という形にここでの台詞は劇中人物たちに配分されている。主人公ブルータスが暗殺計画の方向と段階という彼の運命の方向と段階を自ら、たとえ反対されようとも築いている過程——これが基本的に対話という形で進行する劇の中では、我々が目にするような形で表現されているのである。劇において対話が成立する条件については、後に考察する。

少しだけ言い及んだが、ブルータスが対立意見を尻目に議論を終結させてしまうという表現の意味を考察しておきたい。それは、対立意見という別の選択の余地が対照として存在することによって、決定そのものの重大性（悲劇の一段階としての重要性）が引き立てられているということである。話し合いにおいて最も重い取り返しのつかない決定としての価値を付与されているのは、殺害の対象をシーザーに限定し、アントニーには頓着しないことという決定である。この決定はキャシヤスの主張（II. 155-161）をブルータスが論破するが（II. 162-183）、キャシヤスは納得せず再び議題を蒸し返し（II. 183-184）、それをブルータスが却下する（II. 185-189）という手続きでなされるように書かれている。これと酷似する表現方法（台詞の配列および配分）は、ブルータスがアントニーに追悼演説を許可する段取り、およびフィリパイに攻め入るかあるいは待つて敵を迎え撃つかということに関する決議にも見られる。具体的に言えば、前者は（アントニーに）ブルータスが演説の許可を与えようとする（III. i. 231）、キャシヤスが引き止めるが（II. 231-235）、ブルータスは自分の考えを説明し（II. 235-242）、キャシヤスが表明する不安と不満（I. 243）を無視して、再び（アントニーに向って）許可の言葉の述べる（II. 244-251）という手続きで、後者はブルータスが進軍を提案し（IV. iii. 196-197）、それにキャシヤスが反対を唱え（I. 198）、理由を要求され（I. 198）説明するが（II. 198

-202), ブルータスは自らの戦略の方が勝っている旨を説き (II. 203-212), キャシャスが口を挟もうとするのを (I. 212) 遮って自説の主張を続け (II. 213-224), 終にキャシャスが折れる (II. 224-225) という手続きでなされるように書かれている。シェイクスピアはこのような形に台詞を配列かつ配分することによって、出来事(決定に至るまでの曲折)を伝達するだけではなく、決定自体の致命性を強調し、ブルータス(および彼の仲間たち)の挫折を暗示することも果している。<sup>10</sup>

しかし別面このような台詞の配列および配分は、劇の進行(台詞の流れ)という観点から見なければならぬものである。ブルータスの反論を招く提案や意見として語られる彼の仲間たちの(大方はキャシャスの)台詞が劇の進行に果す機能も併せて考えなければならない。

#### IV

ブルータスの仲間たちのうち、先ずキャシャスを除いた五人の台詞を見てみよう。ブルータスとキャシャスが二人だけで何事かを語り合っているという漠然とした状況の時間的空白を埋めている台詞を除けば、彼らは話し合いの箇所では各々二つずつ台詞を与えられている。そして総行二十五行半に過ぎない十の台詞のうち、六つはキャシャスあるいはブルータスに対する同意(I. 143 (Casca); I. 143 (Cinna); II. 144-149; I. 153; II. 190-191; I. 214), 三つはキャシャスが行う実質上の提案を引き出すきっかけとなる問題提起や提案・申し出(I. 154; I. 193; II. 202-211), 残りがブルータスの命令を引き出す意見(II. 215-217)である。つまり彼らの台詞はブルータスあるいはキャシャスの台詞を受けるか、二人の台詞に引き継がれることによって、骨組となる台詞の流れを円滑にする機能を果すものである。彼らの台詞の意味(価値)は、台詞の内容自体というより存在自体が作り出す、話し合いが二人ではなくて七人で行われているという雰囲気求められる。

<sup>10</sup> 『アントニーとクレオパトラ』には、アントニーが、陸戦を支持するキャニディヤス、イノバース、さらに一兵士の反対に遇いながら、結果的に彼を滅亡に導く海戦説を譲ろうとしない、というさらに念の入った形が見られる(III. vii. 27-66)。

実質上話し合いはキャシヤスとブルータスの言葉の遣り取りとして書かれていることを確認した。無論ここに見られる二人の意見の対立には二人の性格の対照性も表現されているであろう。しかし今我々が問題にしたいことは、たとえ他の五人にも幾許かの台詞が与えられて七人の話し合いという外観が整えられていようとも、ここに劇が進行するための最も基本的な形である対話 (*dialogue*), すなわち相対する二人の言葉の遣り取りが露呈していることである。キャシヤスとブルータスは話し合いの間一貫して言葉を遣る(提案する)側と取る(それに対する意見を述べる)側をそれぞれ受け持たされているのであって、我々は二人が対立していると見る前に、言葉というエネルギーを発する側とそれを受け止めた上で返す側との二極に二人が対置されていることに注目しなければならない。<sup>11</sup> キャシヤスやブルータスの性格や二人の対照性を引き出そうとするあまり、二人の台詞がそれぞれどちら側の極から発せられるものになっているか、どの言葉を受けた上で出されるものになっているか、あるいはどの言葉に受けられるように出されるものになっているかということを無視して、二人の台詞を同列に並べたり、あるいは各人物が一つのシーンや劇全体の中で与えられる台詞を総合するようなことは慎まなければならない。

第四幕第二場から第三場にかけて(ブルータスとキャシヤスが舞台に留まることになっているから、実際には一つのシーンにおいて)、二人の口論が続けられるが、口論においても二人は言葉のエネルギーを発する側と受ける側に対置されている。つまり双方とも怒りをぶつける言葉や相手を非難する言葉を語られることはなく、一旦ある時点までは怒りをぶつける側と受け流す側、あるいは非難する側と抗弁する側のどちらかに回され、後に付く側を交換させられている。具体的には、まずキャシヤスが抗議をする側で、これをブルータスがたしなめる側に回り一旦中断させる(IV. ii. 37-47)。再びキャシヤスが抗議体制に入るが(IV. iii. 1-8)、今度はすぐにブルータスが‘Let me tell you, Cassius, you yourself Are much condemn’d to have an itching palm, . . .’(II. 9-10)

<sup>11</sup> See Bernard Beckerman, ‘Shakespeare’s Industrious Scenes,’ *Shakespeare Quarterly*, 30 (1979), 138-50.

と言って非難する側に回ると、キャシヤスは ‘I, an itching palm? . . .’ (l. 12); ‘Chastisement?’ (l. 17) と相手の言葉を鸚鵡返しに反復したり, ‘Brutus, bait not me, I’ll not endure it’ (ll. 28-29); ‘Urge me no more, I shall forget myself; . . .’ (l. 35) と相手を制したり, ‘Is’t possible?’ (l. 38); ‘O ye gods, ye gods, must I endure all this?’ (l. 41) と相手の浴びせる罵詈雑言に悶える側に回る (ll. 9-82)。しかし彼がブルータスの薄情さに対する抗議を開始すると、ブルータスは(意地悪くであるが) 応対する側に回り (ll. 82-92), キャシヤスの悲嘆が絶頂に達するとそれを宥め (ll. 93-113), 彼が行う一つの質問に(友情を以って) 返答し, 和解が成立する (ll. 113-123), というように口論は作られている。劇で口論という言葉の遣り取りが成立しかつ持続するためには、非難する側と、「これ以上我慢できない」と言いながらも実際には耐え続けて相手の言葉を受け止める側とが作られる必要があるということであろう。

付言するが、口論においてブルータスを攻撃側、キャシヤスを守備側とする言葉の遣り取りとして書かれた一連の短い台詞は、ブルータスの抗議や罵詈としての長い台詞 (ll. 18-28; ll. 42-50; ll. 65-82) に区切られていて、彼の怒りが度を加えていることおよび口論が激化していることが、この〈段落分け〉によって明確化されている。その後キャシヤスが抗議側に移ってからは、二人の短い一連の台詞にキャシヤスの長い台詞 (ll. 93-107) が続けられるが、そこは彼の悲嘆の絶頂および口論全体のクライマックスに一致する。上演において役者の肉声を与えられれば、観客は短い一連の台詞が続けられる間に蓄積されたエネルギーが長い台詞によって一挙に放出され、そしてそれが反復されるのを心の深層でしかし確実に経験させられるだろう。以前〈詩脚〉と〈韻律〉に比したこのような台詞の配列は、シェイクスピア劇のいたるところに見い出せるものである。シェイクスピア劇では、対置された二者によって支えられる一連の短い台詞の流れが前置きとなって長い台詞を導き、そうして発せられた長い台詞の後を再び一連の短い台詞の流れが引き取るという型が、〈韻律〉の基本となっているのではないかと想像される。しかしこれを主張するには、シェイク

スピア劇全体を調査してみなければならない。

ここで、二者が対置された状態が劇の進行（台詞の流れ）を支えていることを示す例で興味深いものをいくつか挙げてみる。『ジュリアス・シーザー』は護民官二人と平民たちとの間で行われる尋問と答弁で始まるが、二人が平民たちを追い返した後の彼らの言葉とされる台詞は、命令とそれに対する疑念そして答弁という形で書かれている。

*Flav.* . . .

Go you down that way towards the Capitol,  
This way will I. Disrobe the images,  
If you do find them deck'd with ceremonies.

*Mur.* May we do so?

You know it is the feast of Lupercal.

*Flav.* It is no matter, let no images

Be hung with Caesar's trophies. . . . (I. i. 63-69)

ここからマララスの精神状態（ぐらつき等）を読み取ることが無意味であることは改めて断るまでもない。シェイクスピアは、彼らの対する相手である平民たちを退場させた時点で、状況を説明するとともに彼ら自身の退場の意味付けともなる台詞を彼らの言葉の遣り取りとして書くために二人を対置したのである。

第三幕第三場は幕開きの変形で、ここでは平民たちと詩人との間で尋問と答弁が行われる。そのとぼけた掛け合いは詩人が暗殺者と同名の「シナ」を名乗った瞬間、その決定的な答えによって、尋問する側と答弁する側という二極を喪失して終る。そして注目したいことは、シェイクスピアがこの掛け合いをある時間持続させるために、平民その一に名前の質問を最初にさせておきながら (l. 5)、それに対する答えは最後にさせて (l. 27)、平民たちと詩人とを対置させ続けていることである。これは幕開きでも同じことで、後でわかることだが、シーザーの台頭を嫌う護民官と職人連とのおどけた遣り取りが可能になっているのは、職業の尋問が先に来て (l. 5)、職人連が仕事を怠けている理由（シーザーの凱旋を見物すること）についての質問 (ll. 27-28) が後に回されている

からである。

第二幕第一場の残りであるポーシャの心配が示される部分 (ll. 233-309) とブルータスとライゲアリヤスとの会談 (ll. 310-334) について一言ずつ触れておきたい。まずポーシャとブルータスとの遣り取りは、ポーシャが心痛の原因を打ち明けて欲しいと懇願するのに対して、ブルータスがそれを拒絶し続けることによって成立している。そして彼女が自分の精神力を試すために刺したという太腿を示すことにより、ブルータスの心が開かれて、懇願する側と拒絶する側という二極が消失して二人の遣り取りは終る。この、劇の進行には直接貢献しない挿話的部分は、ブルータスのところから仲間たちが引き上げた後、そのうちの一人であるミテラスの言伝によるとされるライゲアリヤスの来訪に至るまでの時間経過を埋める機能を果すものであり、直前まで続いていた段階的發展を受け継いではない。一方それに続く最後の部分には、劇の進行に言わば〈弾み〉を着けるものとなっている。最後はブルータスとライゲアリヤスとの会談の体を成しているが、ライゲアリヤスの来訪という設定はブルータスの退場をシーザー殺害の決行に向う力強い行動として意味付けるものに他ならない。ライゲアリヤスの申し出や質問に対するブルータスの受け答えという形の言葉の遣り取りが一頻り続いたところで、ライゲアリヤスが 'Set on your foot, And with a heart new-fir'd I follow you, . . .' (ll. 331-332) と熱意を以って申し出て、それをブルータスが同じだけの強さで 'Follow me then' (l. 334) と言って受け入れることによって、二人の会談に決着が付き (言葉のエネルギーの遣り取りが終結して)、彼らの歩行 (退場) が実行に向う力強いものとしての価値を帯びるのである。<sup>12</sup>

対置された二者の言葉の遣り取りというより、言葉の遣り取りを行わせるために対置された二者の例や、二者が対置された状態が消失する時点が巧妙に操作された例を併せて見ることによって、シェイクスピア劇の基本的な台詞の流れを支えているものを確認した。この期に及んで話を第二幕第一場におけるブルータスとキャシャスの遣り取りに戻すことは無用の重複であるから、最後に

<sup>12</sup> スミスは、このブルータスの最後の台詞すら十四例に数え挙げている (Smith, p. 370)。

我々が確認したことを応用して次の例を検討することによりこの章の纏めとしたい。

第一幕第二場には、シーザーとアントニーの次のような台詞がある。

*Caes.* Antonio!

*Ant.* Caesar?

*Caes.* Let me have men about me that are fat,  
Sleek-headed men and such as sleep a-nights.  
*Yond Cassius* has a lean and hungry look,  
He thinks too much; such men are dangerous.

*Ant.* Fear him not, Caesar, he's not dangerous,  
He is a noble Roman, and well given.

*Caes.* Would he were fatter! but I fear him not.  
Yet if my name were liable to fear,  
I do not know the man I should avoid  
So soon as *that spare Cassius*. . . .

(ll. 190-201)

ここからシーザーのキャシヤスの本性を見抜く目の確かさと、それと対照的なアントニーの判断の誤りとを読み取ろうとする評者もある。<sup>18</sup> 彼らの台詞にはそのような対照性は全く表現されていないと言い切るつもりはないが、力点ももっと別のことに置かれていることは確かである。まず二人の台詞が語られる状況であるが、それは、既にシーザー打倒を目論んでいて、現にシーザーの一行が戻って来る直前まで彼の弱点を数え挙げることに彼の増長ぶりを批判することによってブルータスを味方に付けることに全精力を注いでいたキャシヤスと、彼の側に傾きかけているブルータスとが、シーザーの一行が通過するのを注視するという状況である。ここは、その大部分を占める台詞の語り手であるシーザーと、彼によって評されるキャシヤスに、さらには、シーザーから離反しつつあり、シーザーの評するキャシヤスと同様危険人物になりつつあるブルータスにも、受容者である観客の意識を向けさせるように作られている。整理

<sup>18</sup> T. S. Dorsch, Introduction to *Julius Caesar: The Arden Edition*, ed. Dorsch (London: Methuen, 1955), p. xlvii.



し直せば、ここは(無論アントニーの台詞も含めて)、ほとんど本能的にキャシヤスを嫌悪するシーザーが、彼に敵意を抱くキャシヤスの目の前を通過する際に生ずる二人の緊張関係と視線の衝突、そしてまだキャシヤスのようには疑われていないブルータスがシーザーに対して投げかける批判的な視線——このような極度に張り詰めた空気を観客に経験させるように書かれているのである。

そこでアントニーの台詞の存在価値が我々の問題となる。最初のシーザーの呼び掛けとそれに対するアントニーの答えに明らかなように、この部分では言葉のエネルギーを発する側とそれを受ける側として、シーザーとアントニーが対置されている。アントニーの‘Fear him not, Caesar, . . .’ (ll. 196-197) は、呼び掛けに対する答えと同様シーザーの台詞を受けかつ彼の台詞を引き出すためのもの、つまり対話の形式を成立させるための台詞である。そして彼らの二対の短い台詞の遣り取り (ll. 190-197) は、シーザーの‘Would he were fatter!’ 以下の長い台詞 (ll. 198-214: 17 ll.) の前置きとなる。アントニーの台詞はシーザーの台詞が観客から受ける注意と等量の注意を喚起する(そして観客に二人を対照させる)ものとは言い難いのである。<sup>14</sup>

観客が力点の置かれていない、すなわち注意を引き付けようとしていない要素に反応するということは有り得ないだろう。しかし我々は常に[台詞を与えられた人物名] (Speech Prefix) + [台詞] という形で印刷されたテキストを目の前にして議論をしなければならない。誤って力点の置かれていない要素にあまり積極的な意味を持ち込んだりすることがないように、少なくとも台詞の流れを成立させる基本的要素を把握しておく必要があるだろう。

## V

本稿は分析の対象を一旦『ジュリアス・シーザー』第二幕第一場と定めた上

<sup>14</sup> ただし、後にシーザーの敵を討つ人物であるアントニーが、暗殺が行われる前に(差し当ってこの第一幕第二場で)シーザーに恭しく接しているという状況が作られていることは重要なことであるから、その意味では、アントニーがここで台詞を与えられていることは価値のあることである。

で考察を進め、他の例を挙げる際もほとんどこの劇以外には求めなかった。しかし度々述べたように、本稿で取り上げた台詞の配列および配分の作法はシェイクスピア劇全般に広く認められるものである。方法を変えて、まず台詞の配列や配分の様相を観察する視点を限定して、それに関してシェイクスピア劇全体では、あるいは各ジャンルごとには、何種類の基本的な型が認められるかということ調べることは有効であろう。例えば、対話の体裁を持たない台詞は、視点を定めた上での話だが、どのように劇の中に組み込まれているのかとか、主人公から端役に至るまでの各層の格付けの人物には、種類やレベルを限定した上で、いかなる台詞が配分されているか、あるいはないかというように、又、短い台詞と長い台詞の配列（組み合わせ）には、やはり視点を定めた上で、どのような基本的な型が認められるかというようにである。そして、このような分析・調査を積み重ねて行けば、いつの日かシェイクスピアの台詞の配列と配分の作法に関する〈目録〉が出来上るのでないかと期待される。

## APPENDIX A

### BRUTUS' MONOLOGUE INTERRUPTED BY LUCIUS' ENTRIES

*Enter BRUTUS in his orchard.*

*Bru.* What, Lucius, ho!  
I cannot by the progress of the stars  
Give guess how near to day. Lucius, I say!  
I would it were my fault to sleep so soundly.  
When, Lucius, when? Awake, I say! What, Lucius!

5

*Enter LUCIUS.*

*Luc.* Call'd you, my lord?

*Bru.* Get me a taper in my study, Lucius.  
When it is lighted, come and call me here.

*Luc.* I will, my lord.

*Exit.*

1) *Bru.* It must be by his death; and for my part,  
I know no personal cause to spurn at him,  
But for the general. He would be crown'd:  
How that might change his nature, there's the question.  
It is the bright day that brings forth the adder,  
And that craves wary walking. Crown him that,  
And then I grant we put a sting in him  
That at his will he may do danger with.  
Th' abuse of greatness is when it disjoins  
Remorse from power; and to speak truth of Caesar,  
I have not known when his affections sway'd  
More than his reason. But 'tis a common proof  
That lowliness is young ambition's ladder,  
Whereto the climber-upward turns his face;  
But when he once attains the upmost round,  
He then unto the ladder turns his back,  
Looks in the clouds, scorning the base degrees  
By which he did ascend. So Caesar may;

10

15

20

25

Then lest he may, prevent. And since the quarrel  
 Will bear no color for the thing he is,  
 Fashion it thus: that what he is, augmented, 30  
 Would run to these and these extremities;  
 And therefore think him as a serpent's egg,  
 Which, hatch'd, would as his kind grow mischievous,  
 And kill him in the shell.

*Enter LUCIUS.*

*Luc.* The taper burneth in your closet, sir. 35  
 Searching the window for a flint, I found  
 This paper, thus seal'd up, and I am sure  
 It did not lie there when I went to bed. *Gives him the letter.*

*Bru.* Get you to bed again, it is not day.  
 Is not to-morrow, boy, the ides of March? 40

*Luc.* I know not, sir.

*Bru.* Look in the calendar, and bring me word.

*Luc.* I will, sir. *Exit.*

2) *Bru.* The exhalations whizzing in the air  
 Give so much light that I may read by them. 45  
*Opens the letter and reads.*

"Brutus, thou sleep'st; awake, and see thyself!

Shall Rome, etc. Speak, strike, redress!"

"Brutus, thou sleep'st; awake!"

Such instigations have been often dropp'd

Where I have took them up. 50

"Shall Rome, etc." Thus must I piece it out:

Shall Rome stand under one man's awe? What, Rome?

My ancestors did from the streets of Rome

The Tarquin drive when he was call'd a king.

"Speak, strike, redress!" Am I entreated 55

To speak and strike? O Rome, I make thee promise,

If the redress will follow, thou receivest

Thy full petition at the hand of Brutus!

*Enter LUCIUS.*

*Luc.* Sir, March is wasted fifteen days. *Knock within.*

*Bru.* 'Tis good. Go to the gate, somebody knocks. *Exit Lucius.*

- 3) Since Cassius first did whet me against Caesar, 61  
I have not slept.  
Between the acting of a dreadful thing  
And the first motion, all the interim is  
Like a phantasma or a hideous dream. 65  
The Genius and the mortal instruments  
Are then in council; and the state of a man,  
Like to a little kingdom, suffers then  
The nature of an insurrection.

*Enter* LUCIUS.

*Luc.* Sir, 'tis your brother Cassius at the door, 70  
Who doth desire to see you.

*Bru.* Is he alone?

*Luc.* No, sir, there are moe with him.

*Bru.* Do you know them?

*Luc.* No, sir, their hats are pluck'd about their ears,  
And half their faces buried in their cloaks,  
That by no means I may discover them 75  
By any mark of favor.

*Bru.* Let 'em enter. *Exit Lucius.*

- 4) They are the faction. O Conspiracy,  
Sham'st thou to show thy dang'rous brow by night,  
When evils are most free? O then, by day  
Where wilt thou find a cavern dark enough 80  
To mask thy monstrous visage? Seek none, Conspiracy!  
Hide it in smiles and affability;  
For if thou path, thy native semblance on,  
Not Erebus itself were dim enough  
To hide thee from prevention. 85

*Enter the conspirators, CASSIUS, CASCA, DECIUS, CINNA, METELLUS,  
and TREBONIUS.*

**APPENDIX B**  
**THE ARGUMENT**  
**BETWEEN BRUTUS\* AND HIS FELLOWS**

- 1)\* *Bru.* Give me your hands all over, one by one.  
*Cas.* And let us swear our resolution.
- \* *Bru.* No, not an oath! If not the face of men,  
 The sufferance of our souls, the time's abuse— 115  
 If these be motives weak, break off betimes,  
 And every man hence to his idle bed;  
 So let high-sighted tyranny range on,  
 Till each man drop by lottery. But if these  
 (As I am sure they do) bear fire enough 120  
 To kindle cowards, and to steel with valor  
 The melting spirits of women, then, countrymen,  
 What need we any spur but our own cause  
 To prick us to redress? what other bond  
 Than secret Romans, that have spoke the word 125  
 And will not palter? and what other oath  
 Than honesty to honesty engag'd  
 That this shall be, or we will fall for it?  
 Swear priests and cowards, and men cautelous,  
 Old feeble carrions, and such suffering souls 130  
 That welcome wrongs; unto bad causes swear  
 Such creatures as men doubt; but do not stain  
 The even virtue of our enterprise,  
 Nor th' insuppressive mettle of our spirits,  
 To think that or our cause or our performance 135  
 Did need an oath; when every drop of blood  
 That every Roman bears, and nobly bears,  
 Is guilty of a several bastardy,  
 If he do break the smallest particle  
 Of any promise that hath pass'd from him. 140
- 2) *Cas.* But what of Cicero? Shall we sound him?  
 I think he will stand very strong with us.  
*Casca.* Let us not leave him out.

- Cin.* No, by no means.
- Met.* O, let us have him, for his silver hairs  
Will purchase us a good opinion, 145  
And buy men's voices to commend our deeds.  
It shall be said his judgment rul'd our hands;  
Our youths and wildness shall no whit appear,  
But all be buried in his gravity.
- \* *Bru.* O, name him not; let us not break with him, 150  
For he will never follow any thing  
That other men begin.
- Cas.* Then leave him out.
- Casca.* Indeed he is not fit.
- 3) *Dec.* Shall no man else be touch'd but only Caesar?  
*Cas.* Decius, well urg'd. I think it is not meet, 155  
Mark Antony, so well belov'd of Caesar,  
Should outlive Caesar. We shall find of him  
A shrewd contriver; and you know, his means,  
If he improve them, may well stretch so far  
As to annoy us all; which to prevent, 160  
Let Antony and Caesar fall together.
- \* *Bru.* Our course will seem too bloody, Caius Cassius,  
To cut the head off and then hack the limbs—  
Like wrath in death and envy afterwards;  
For Antony is but a limb of Caesar. 165  
Let's be sacrificers, but not butchers, Caius.  
We all stand up against the spirit of Caesar,  
And in the spirit of men there is no blood;  
O that we then could come by Caesar's spirit,  
And not dismember Caesar! But, alas, 170  
Caesar must bleed for it! And, gentle friends,  
Let's kill him boldly, but not wrathfully;  
Let's carve him as a dish fit for the gods,  
Not hew him as a carcass fit for hounds;  
And let our hearts, as subtle masters do, 175  
Stir up their servants to an act of rage,  
And after seem to chide 'em. This shall make  
Our purpose necessary, and not envious;  
Which so appearing to the common eyes,  
We shall be call'd purgers, not murderers. 180  
And for Mark Antony, think not of him;

- For he can do no more than Caesar's arm  
When Caesar's head is off.
- 4) *Cas.* Yet I fear him,  
For in the ingrafted love he bears to Caesar—
- \* *Bru.* Alas, good Cassius, do not think of him. 185  
If he love Caesar, all that he can do  
Is to himself—take thought and die for Caesar;  
And that were much he should, for he is given  
To sports, to wildness, and much company.  
*Treb.* There is no fear in him; let him not die, 190  
For he will live, and laugh at this hereafter. *Clock strikes.*
- 5) \* *Bru.* Peace, count the clock.  
*Cas.* The clock hath stricken three.
- 6) *Treb.* 'Tis time to part.  
*Cas.* But it is doubtful yet  
Whether Caesar will come forth to-day or no; 195  
For he is superstitious grown of late,  
Quite from the main opinion he held once  
Of fantasy, of dreams, and ceremonies.  
It may be these apparent prodigies,  
The unaccustom'd terror of this night,  
And the persuasion of his augurers 200  
May hold him from the Capitol to-day.  
*Dec.* Never fear that. If he be so resolv'd,  
I can o'ersway him; for he loves to hear  
That unicorns may be betray'd with trees,  
And bears with glasses, elephants with holes, 205  
Lions with toils, and men with flatterers;  
But when I tell him he hates flatterers  
He says he does, being then most flattered.  
Let me work;  
For I can give his humor the true bent, 210  
And I will bring him to the Capitol.  
*Cas.* Nay, we will all of us be there to fetch him.  
\* *Bru.* By the eight hour; is that the uttermost?  
*Cin.* Be that the uttermost, and fail not then.
- 7) *Met.* Caius Ligarius doth bear Caesar hard, 215  
Who rated him for speaking well of Pompey;  
I wonder none of you have thought of him.  
\* *Bru.* Now, good Metellus, go along by him.



He loves me well, and I have given him reasons;  
Send him but hither, and I'll fashion him. 220

8) *Cas.* The morning comes upon 's. We'll leave you, Brutus,  
And, friends, disperse yourselves; but all remember  
What you have said, and show yourselves true Romans.

\* *Bru.* Good gentlemen, look fresh and merrily;  
Let not our looks put on our purposes, 225  
But bear it as our Roman actors do,  
With untir'd spirits and formal constancy.  
And so good morrow to you every one. *Exeunt. Manet Brutus.*